

一八八三年十二月九日(日)

タクール、聖ラーマクリシユナ、ドツキネーシヨル南神村のカーリー寺院にて信者と共に語る

バクテイ信仰のヨーガ——マハーブラフ三味の原理と大聖師の境地

日曜日。キリスト暦一八八三年十二月九日。オグロハヨン白分十日目。時間は午後一時か二時ころ。タクール、聖ラーマクリシユナは、自室の小ベッドの上にお坐りになって、信者たちと神の話をしている。アダル、マノモハン、ターニヤのシヴァチャンドラ、それからラカール、校長、ハリシユたち大勢が床に坐っている。ハズラーもまだここに泊まりつづけている。タクールはマハーブラフ大聖師(チャイタニヤ)の境地について話しておられる。

聖ラーマクリシユナ「(信者たちに向かつて) チャイタニヤデーヴ様には三つの境地がおありだつた——

第一は外の境地——このときは、おおき粗大なもの(粗大スウクランヤリウ体)やちひさい微細なもの(微細スウクレンマンヤリウ体)に心が向いていた。

第二は半外半奥の境地——このときは、心は原因カールナ・シャリウ体に入つて、その歡喜に浸っていた。

第三は深奥の境地——このときは、心は大原因マハカールナに引き込まれていた。

ヴェーダーンタのバンチャ・コーシヤ五鞘ハと、これはとてもよく一致するんだよ。粗大体というのは、アンナ・マヤ・コーシヤ物質ハ鞘

と生命鞄ブラーナ・マヤ・コーシヤにあたる。微細体はつまり、精神鞄マノー・マヤ・コーシヤと覚智鞄ヴァイジュニヤト・マヤ・コーシヤにあたる。原因体は歎喜アーナシ・マヤ・コーシヤだ。大原因は五鞘を超越している。大原因に心が入ると、つまり三昧だ。これはニルヴィカルバ三昧サマデーとかジャヤ三昧サマデーと呼ばれている。

チャイタニヤ様デーブは、外の境地サマデーのときは、称名したり讃神歌をうたったりなすった。半外半奥の境地デーブのときは、信者たちといっしょに踊りなすった。深奥の境地デーブのときは、三昧にお入りになった。校長は内心でつぶやいた。——タクルはご自身の境地を、こんなふうにして説明しておられるのだらうか？ チャイタニヤ様デーブもこんなふうだった、ということだ——。

聖ラーマクリシュナ「チャイタニヤは信仰の権化だ。人間に信仰を教えるために、この世にいらつ

(訳註)インドでは、身体はいくつかの層、あるいは鞘マヤから作られていると考えられている。一つは三身体トリ・シャリーラという考え。これは、身体は三つの身体から成るといふもの。一番外に粗大體(ストウーラ・シャリーラ)。その内側に微細体トリー・シャリーラ(スークシユマ・シャリーラ)——これはアストラル体とも呼ばれる。最も内側には原因体(カーラナ・シャリーラ)、この身体は前世からの因縁で成っている個人の本質である。もう一つは五つの鞘コシヤという考え。これは身体は五つの鞘コシヤから成るといふもの。一番外はアンナ・マヤ・コーシヤ。「アンナ」は食べ物、マヤは「くから成る」、コーシヤは「鞘マヤ」、つまり食べ物から成る鞘コシヤ肉体のこと。その内側はブラーナ・マヤ・コーシヤ。この鞘はブラーナ「気、生命エネルギー」から成る。その内側はマノー・マヤ・コーシヤ。この鞘はマナス「意」から成る。その内側はジュニヤーナ・マヤ・コーシヤ。この鞘はジュニヤーナ「智」から成る。最も内側の鞘はアーナンダ・マヤ・コーシヤ。アーナンダ「歎喜、歎び」から成る。

しゃつたのだ。あの御方に対する信仰を獲得すれば、すべては成就する。ハタ・ヨーガなんてものは何の必要もない」

〔ハタ・ヨーガとラージャ・ヨーガ〕

信者の一人「さようでございますか。で、ハタ・ヨーガというのは、どんなことをするのでございましょう?」

聖ラーマクリシュナ「ハタ・ヨーガというのは、肉体のことにばかりに精神を集中するんだよ。中をきれいにするとかいつて、肛門に竹の管をさし込んで洗ってみたり、陰茎から牛乳やギー(バター)を吸い込んでみたりする。舌の訓練をしたりね。特別の坐り方をして、時たま、空中に浮き上がったりもするよ! あれはみんな体内の気流ヴァーユの仕業だ。ある魔術師が皆に見せているうちに、舌がまくれ上がってアゴにくっついてしまった。身動きもしなくなった。見物人は、魔術師は死んだと思った。何年も墓に埋められていた。長年の後、何かのことでその墓が壊された! その男は突然、息を吹き返して気がついた。それから叫び出した。——『アーラ、不思議! タネも仕掛けありませんぞ!』(一同大笑) こういうのもみんな、体の気流ヴァーユのなせる業わざさ。

ヴェーダーンタ派ではハタ・ヨーガを認めない。

ハタ・ヨーガもあるが、ラージャ・ヨーガというものもある。ラージャ・ヨーガは心の力を通じて神と合一する——信仰と哲学的思念によって、神と一体になることを教えている。このヨーガはいよいよ。

ハタ・ヨーガはよくない。いまの時代は、人は食べ物に依存しているんだ！」

タクルの苦行——タクルの身内の人たち——未来の大聖地

タクル、聖ラーマクリシュナは音楽塔ナハバトのわきの道に立っていらつしやる。ふとご覧になると、モニニ（校長）が音楽塔ナハバトのペランダの片端に坐つて、垣根の陰で深い瞑想に入っているのを見つけた。神について考えているのだろうか？ タクルはジャウタラからお帰りになるところだったが、向きを変えて歩みよられた。

聖ラーマクリシュナ「なーんだ、ここに坐っていたのかい！ お前はもうすぐ上がるよ。もうホンの少し進めば、誰かが、『ソレだ、ソレだ！』と言ってくれるよ」

モニは驚いてタクルの方を見上げた。まだ坐つたままである。

聖ラーマクリシュナ「お前はもう時期がきている。鳥は卵が孵かえるときでないと卵の殻を割らない。お前の霊的な理想——お前の居るべき処のことを言っているのさ」

こうおっしゃって、タクルはモニの居るべき処について、繰り返し話されるのだった。

「誰でもが皆、長い間苦行をしなければならぬ、ということもないんだよ。わたしの場合は、しかし、ずいぶん苦しい思いをした。土を枕にして寝ていたものだ。日の経つのもわからないほどだった。ただ、ただ、気狂いのように、マー、マー、と呼んで泣いていた」

モニは、タクルのところへ通うようになってから、かれこれ二年になる。彼は英語が使える。タ

クルルは時々彼のことを、イギリス人^グとお呼びになる。英国式の大学で学び、結婚もしている。

彼はケーシヤブはじめ、いろいろな学者たちの講演を好んで聴き、英国の哲学や科学の本を読むのが大好きだった。だが、タクルルのところへ来るようになったのを境に、ヨーロッパの学者の著書や、英語やその他の言葉での講演が味気なく感じられてきた。

現在では夜昼かまわず、ただタクルルを眺めては、聖なるお口から出る言葉を聞いているのが無上の喜びなのである。最近^{ちかごろ}は、タクルルが言われた一つのことをいつも考えている——修行^{チヤダ}をすれば見^{イシユワラ・タルヤン}神^{カミ}できる。そしてこれが、人間として生まれてきた真^{ほんとう}の意味なのだ。

聖ラーマクリシュナ「ほんのちよつと進めば、誰かが、『ソレ、ソレ』と言ってくれる。お前、エーカーダシーをお守りよ。お前たちはわたしのほんとの身内なんだ。そうでなかったら、どうしてこんなところへやってくるんだい？ いつか讚^{キールダ}神歌を聞いていたら、ヴラジャでクリシュナの輪踊りの輪のなかに、ラカールがいるのが見えたよ。ナレンドラはとびきり高いところの人だ。それからヒーラナンダもそうだ。あの子供みたいな性質——。それに、なんて優しい気持ちの人だろう。あの人にも会いたいねえ」(訳註、エーカーダシー——満月や新月の十一日目に、丸一日または半日を断食して祈り、礼拝する信仰行事)

〔以前の話し——チャイタニヤの伴侶——トゥルシーの植樹——シエジヨさんの奉仕〕

「ガウランガ(チャイタニヤ)の伴侶たちを全部見たことがある。前三昧の時ではなく、この肉眼^めでだよ！ 以前^{まえ}はそういうものが、この目で見えたもんだ！ 今は、前三昧^{パニツア}にならないと見えないがね。

この目で、ガウランガの伴侶たちを見たんだよ。そのなかに確か、お前もいたような気がする。バララームもいたようだ。

誰かに会ったとき、わたしが『ピクン』と跳び上がるのを知ってるだろう。長いこと会わなかった身内に会うと、そんな様子になるものだ。

大実母に泣き泣き頼んだものだよ。——『マー！ わたしは信者に会いたくて死にそうだ！ 一刻も早く、信者たちをわたしのところによこしておくれ！』

それから、心に思ったことは何でもその通りになった。

五聖樹パンチャパティの柱にトゥルシーの聖木を植えた。そこで称名や瞑想をしようと思ってね。そのまわりに、ぜひ竹垣を結いたいと思った。思ったすぐ後で、一束の竹の棒と縄がガンジス河を流れてきて、五聖樹の杜のところに流れついたよ！ 寺の召使いが小おどりしながらやってきて、そのことを知らせてくれたつけ。

こういう境地にいるときは、規則通りの礼拝儀式はできなくなるんだよ。大実母マに言った——『マー、誰がわたしの面倒を見てくれる？ マー！ わたしにはそんな力もないから、自分の身の周りの仕末もできないよ。それに、あんたの話を聞いていたいし、信者たちに食べさせてもやりたい。来た人に何かちよつとしたものをやりたい。こういうことを、マー、どうしたら出来るかしら。マー、あんた、誰か金持ちを一人よこしておくれよ！』そうしたらマア、そういうことをみんな、シエジヨさん(マ トゥール氏、ラースマニ家の娘婿)がしてくれるようになった。

それからまた、こう言ったよ。『マー！ わたしに子供ができる筈がない。けれど、清い信仰の少年こどもが一人、いっしょに居てくれたらなあ。そういう少年こどもを、わたしに授けておくれ』そうしたら何と、ラカールがやってきた。こうしたわたしの骨肉みうちはみんな、わたしの一部分だったり、わたしの小片かけらなんだよ」

タクールは五聖樹の杜の方へ歩いて行かれる。校長も後について行く。ほかには誰もいない。タクールは笑いながら、彼と二人でいろんな話をなさっていた。

〔以前の話し——不思議な姿をみる——バニヤン樹の枝〕

聖ラーマクリシュナ「校長に向かつて）ね、ある日見たんだよ——カーリー殿バニヤンから五聖樹チャパティの杜まで、不思議な姿が一つ広がっているのを。このこと、お前、信じられるかい？」

校長はびつくりして、何と返事をしたらいいのかわからずにいた。

彼は杜の木から、葉っぱを一二枚摘みとってポケットにしまいこんだ。

聖ラーマクリシュナ「その枝が折れているだろう、見てごらん。その下でわたしは、いつも坐つて瞑想したものだよ」

校長「私は、そのところの小枝を一本折つて、持ち帰つて家に大事にしまつてあります」

聖ラーマクリシュナ「ハハ、どうして？」

校長「眺めていると、何とも嬉しくなるのです。今にこの場所は、大聖地になると思います」

聖ラーマクリシュナ「はっはっはっはっ、どんな聖地になるんだい？ え、パニハティのようない？」

パニハティはラーガヴ・パンディットが実に盛大きわまる大祭を催すところだ。聖ラーマクリシュナは殆ど毎年、その大祭を見いらっしやって、讃神歌の踊りのなかに加わって、天上のよるこびを身いっぱいにして踊られるのであった。それはちよūd、聖ガウランガが信者たちの呼びかけにジツとしていられなかつたように、ご自分から踊りのなかに入っけて神々しい愛のお姿を見せて下さるのである。

神の話

夕方になった。タクール、聖ラーマクリシュナは自室の小ベッドの上に乗って、宇宙を、大実母を想っていらっしやる。間もなく神殿では神々への献灯アムラディがはじまつた。ほら貝や鈴の音がきこえてきた。校長は今夜、泊まっていく予定である。

しばらくすると、タクールは校長に、「タバクタ・マラー^クを読んできかせてくれ」とおっしゃった。校長は読みはじめた。(訳註、バクタ・マラー——伝記作家ナーバージー〈1973～1983〉の作った説話)

〔聖王、シニエリ聖ジャヤマルの伝記〕

「ジャヤマルと言う心清らかな王様がいた。心の底から聖クリシュナを信愛して帰依していた。

身も心も捧げて定められた祭祀供養を執り行い、その信心は岩のように固かった。

シャーマスンダラ(黒美神)という名のもとに聖クリシュナを礼拝し、他の神、女神には目もくれない。朝から正午までの礼拝を、何ごとをおいても必ず勤めるのが王の固い習慣であった。

王国の領土や財宝などに災難が起ころうとも、見向きもせず、勤行をしていた。

ライバルの王、そのことを聞き知って正午前をねらって攻め込んだ。

王の出撃命令が出ないので諸々の兵たちは、ただ敵の侵攻を見守るばかりであった。

敵が次第に間近まで攻め来るが、王はかまわず礼拝を続けていた。

そこに王の母君が来て、大声をあげて防ぎ戦うべしと哀願する。

このままでは、領地、財宝、ことごとく奪われてしまう。

何と口惜しいことか、武人としての誇りはどこに行った？

ジャヤマルは言う。母君、何を嘆いているのだ。

神から頂いたものを、神が召し上げようとしているのだ。私に何をしろと言うのか。

もし神の意志ならば、いかなる敵でも奪うことは出来ないし、害することも出来はしない。

ちやうどその時、かのシャーマスンダラが馬にうちのり、武器をたずさえて戦場に出て行ったのだ。

信者を傷つけようとする敵の軍勢を打ち倒し、戻って来て馬をつないだ。

礼拝を終えて外へ出た王は、汗まみれに喘ぐわが馬を見た。王は尋ねた。

この馬に乗ったのは誰か。神殿に馬を入れてつないだのは誰か。兵たちは言う。

われらは何も知らない。馬にも乗っていないし、神殿にもつないでいない。

王は心さわぎ、物思いに沈みつづ、兵たちを率いて戦いにのぞんだ。

戦場に行ってみると、敵の軍勢はただ一人を残して全滅している。

不思議なことだ。これはいったいどうしたことか。われ、戦わずして勝ったのか？

やがて生き残った敵の王が恭しく進み出て、ジャヤマル大王に両手をあわせて、何度も拝んでいる。

あのような卓絶の軍師をいただく君の軍兵と、私はふたたび戦う気はさらさらない。

我、財宝もいらぬ、領土もいらぬ。それどころか、私が持っている王国もすべて捧げたし。

もしあの色濃く美しき軍師に就いて語り合うことが出来るのなら、それは無上の喜びである。

かの人を一目見て、兵たちは大地に横たわり、かの人を一目見て、私はたましいを奪われたのだ。

ジャヤマルは覚った。それは、わがシャーマスンダラ（黒美神）！敵の王もまた、それをうなずく。

敵の王はジャヤマル大王の足をとってほめたたえ、聖クリシュナの恵みのかくも深きを知った。

敵の王はジャヤマルと同じく、シャーマスンダラの聖なる御足の下に安息の場を見出したのだ。」

読み終わってから、タクルルは校長と語られる。

〔ジャクタ・マラーは単調——霊の骨肉は誰？ ジャナカ王とシユカデーヴァ〕

聖ラーマクリシュナ「お前、全部信じられるかい？ あの御方が武装して敵兵を滅しなすったとい

うようなこと、みんな信じられるかい？」

校長「信者が一心不乱に祈っていたという、そういう状況は信じられます。でも、武装したタクル(神)をはっきり見たかどうか、それはわからないことです。あの御方が武装して戦場に出てこられたとしても、兵隊たちがはっきりそれを見たのかどうか……」

聖ラーマクリシュナ「ハッハッハッハ。この本には信仰者についての良い話がついている。だが、ちと一方的で単調たんとうだね。違う意見の人たちを悪く言つてるところがある」

一八八三年十二月十日(月)

翌日の朝方、庭園の小道でタクルと校長(モニ)は話し合っている。

モニ「では、私、ここへ来て住まわせていただきましょうか」

聖ラーマクリシュナ「ああ、ずい分お前はよく来るが、どういうわけだろう？ 普通の人はたいいてい、聖者のところに一度会いにくるだけだ。こんなに来るとは、いったいどういうワケだろうねえ？」

モニは沈黙している。タクルはご自分で回答を出された。

聖ラーマクリシュナ「内輪の人でなければ、こうは来ないよ。つまり骨肉みうちなんだ。ほんとの生みの親子のことさ——父親、息子、兄弟、姉妹のことさ。

何もかもは話さないよ。そんなことすれば、お前はもう来なくなるだろう？

シユカデーヴァはブラフマン智を教えてもらうためにジャナカ王のところに行った。ジャナカ王は、『先に授業料を納めろ』と言った。シユカデーヴァは、『先に教えて下すつてから授業料を納めるのが順序ですよ！』するとジャナカ王は、大笑いしながらこう言った。『お前がブラフマン智を獲たら、もう師弟の關係なんてものはなくなるだろうよ。だから先に、授業料の話をするのだ』

信者の胸の内

自分の夜——月は昇った。モニはカーリー殿の庭の小道をそぞろ歩いている。道の片側にはタクル、聖ラーマクリシュナの部屋、音楽塔、バクル林、五聖樹の杜がある。反対側は月光を浴びて銀色にかがやく聖河ガンジスの流れ。

モニはひとりごとを言っている——ほんとに、神を見ることができののだろうか？ タクル、聖ラーマクリシュナは、「それは出来る」とおっしゃる。もう少し進めば誰かがきて、「これだ、これだ」と言ってくれる」と。もう少し修行を積めば……、ということだろう。そうだ、でも結婚して子供まであるのに、それでも神をつかむことができるのだろうか？（少し考えて）もちろん出来るのだ。そうでなかったら、タクルがあんなふうにおっしゃる筈はない。あの御方のお恵みがあれば、どうして出来ぬことがあるのか？

この目の前に展開している世界——太陽、月、星々、生き物、人間、二十四の存在原理。これらすべては、どのようにして成り立ち、そして、その創り主は誰なのだろうか？ そのものと私はどうい

う関係にあるのか？　これがわからなくては、この人生は無意味だ——空虚だ！

タクール、聖ラーマクリシュナは、人類のなかで最も偉大な魂だ。このような偉大な方に、今まで会ったことがない。この御方はたしかに神を見たのだ。さもなければ、クマー、マーグと言って一日中その御方と話をなさるわけがないではないか！　それに、そうでなかったら、どうしてあれほど神を愛することができよう。外界の意識を失くすほどの愛し方を！　三昧に入って、無生物のようにおなりになる程に！　そして、神の愛に酔いしれて、あのように笑い、泣き、踊り、歌うほどに！